
紙芝居

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙芝居

【Nコード】

N5793G

【作者名】

るうね

【あらすじ】

私は泣けない。だから、笑わない。【短期集中連載、全三部の予定です】

Aパート 八重畑ゆうの場合

私は泣けない。だから、笑わない。

私の異常に最初に気付いたのは、当然のことながら両親だった。泣かないのだ。

泣くべき時、普通の人なら泣かずにいられない時に泣かない。代わりに笑う。赤ん坊の頃は、よく笑う子だな、ぐらいに思っていたらしいが、長ずるにつれ、段々とその異常さに気付いてきたそうだ。病院に連れていかれた時の事は、よく覚えている。採血され、頭に電極を付けられ。恐かった。終始、私は笑っていた。恐怖のため笑っていた。

あらゆる検査を終えた後の、医師。その不審顔。

「なんとも……奇病、としか言いようがありませんな」

名前もない、原因も分からない。もちろん治療法など。

救いがたいことに、この病気は笑うべき時には笑えるのだ。そのため、面白いから笑っているのか、悲しいから、恐いから笑っているのか判別できない。

「何を笑ってるんだ！」

よく怒鳴られた。親戚や教師、同年代の子供たち。時には、病気だと分かっているはずの両親にさえ。

辛かった。辛くて辛くて、気付いた時には、私は常に無表情の仮面を被るようになっていた。そうすることで、いちおう「普通の」生活はできるようになった。

私は泣けない。だから、笑わない。

「よ」

軽く手を上げて、こちらに挨拶。

……なんなんだろう、こいつは。

無視して、自分の席へ。といっても、隣の席だ。

「なあなあ、昨日の野球見た？　すげえよな、ハチロー」

「興味ないから」

にべもない私の返事に、多少鼻白むかと思いきや、あ、そう、と特に気にした様子もなく、今度はドラマの話題を振ってきた。

高浜雄大。「大」と名前に付くわりに、小柄な体躯。顔の造作も、目、鼻、口と一通り小造りな中で、ただ眉だけが太い。

学年が上がってクラスが一緒になってから、やたらと私に構ってくるのだ。

「ねえ」

いつの間にか、昨今の政治情勢について論じていた高浜君の声に、むりやり声を被せる。

「はつきり言わないとだめかな」

「なにを」

「迷惑なんだけど、すつごく」

「なにが」

「あなたが私にしていること、全て」

「なんで」

「なんで、だって？」

「一番初めのホームルームで、先生が言ってたでしょう！」

思わず大声を出してしまう。クラスメイトの何人かが、こちらに視線を向けた。

いけない。「仮面」が壊される。

「んー、なんか言ってたっけ？」

こちらの内心などお構いなし、といった風情で、のんびりつぶやく高浜君。

「病気」

「おお、そういえば」

彼は、ポンと手を打ち、

「怒れない病気、だっけ」

「……わざと言ってるでしょう」

「半分くらいは」

「……………」

また激昂しそうになるのを、必死にこらえる。

「ともかく」

絞り出すような声で、

「もう私に構わないで」

「分かった」

ん？

やけにあっさり引き下がるのね。

「ただ、一つ言っておくと、だ」

「なに？」

「俺は、こういう約束を守れたためしがない」

思わず、私は高浜君を引っ叩いた。

それから、半年。

高浜君は、いまだに私にちょっかいをかけてくる。ここ最近はやっつと、ほんのちょっただけ彼を疎ましく思う気持ちが薄くなっていた。

「そしたらすげえんだよ。そのじつちゃんが実は未来から来たサイボーグでさ、烈火の料理人見習いと呼ばれる凄腕のパンツ職人とウエイトリフティングで勝負を」

「なにそれ」

できる限り冷たく言い放つ。それでも、以前までに比べて、言葉の温度がぬるくなってきたことは否定できない。当然、高浜君は、全く意に介さず、

「その勝負で負けそうになったサイボーグが、にらめっこの要領で、

相手を笑わそうとするんだ。こんな風に」

と、自分の両頬をこねるようにしてみせた。思わず吹き出してしまった。

「お、笑った？　いま笑ったな？」

嬉しそうな、彼。小躍りしながら、道を渡る。

と――その襟元に淡い光が灯っていた。なんだろう。

「ねえ、高浜君」

その時、けたたましいクラクションの音が耳をつんざいた。

音のした方向に目を向ける。トラック。ゆっくりと、こちらに向かってくる。ゆっくり、ゆっくり。でも、私の身体も、それ以上にゆっくりとしか反応せず。そのままトラックは私を――横から身体を突き飛ばされた。

激しい衝突音。

私は道に倒れたまま、走り去るトラックを見つめていた。

助かった。誰かが私を突き飛ばしてくれたのだ。誰か？　って誰。決まっている。いつも、私のすぐ近くにいた人。

高浜君が倒れていた。血。ものすごい量。びっくり、ともしない。

少しずつ、頭が事態を理解し始める。

ああ、多分、私は笑っている。

頬を、一筋の水滴が伝った。

雨が、降り出していた。

Bパート 高浜雄大の場合

「君、ちょっといいかな」

「よくない」

そう言って、高浜は歩き出した。

「いやいやいや！」

と、高浜の前に立ちふさがってくる。

「ただ単に道に迷って、駅までの道を訊きたいだけかもしれないだろ？　そういう態度はお兄さん、どうかと思うな」

「道に迷ってるの？」

「いや」

「さよなら」

「ああ、待って、いや待ってください」

再度、立ちふさがってくる。男、だろう。自分のことを「お兄さん」と言っていたし。背はかなり高い。顔は……。

「大体さあ」

高浜はため息を吐き、

「素顔も見せないような相手に、親切にしようとは思えないんだよね」

「いや、これは」

と、男は顔を隠す狐の面をさすり、

「アイデンティティだから」

「そんなもんで自己同一性の確立を図る人とは、余計、関わりたくない」

「それは差別だよ」

「いや、区別だね」

ふう、と男は一息。

「じゃあ、仕方ない。記憶通りにやるか」
と、懐から取り出した。拳銃。

叫ぶ暇もなく、男は高浜に銃口を向け、引き金を引いた。思わず目をつぶる。

何も起こらなかった。

「はは、冗談冗談」

男は拳銃を懷に戻すと、ぽんぽんと高浜の肩を叩いた。

「冗談にしては笑えないね」

険のある高浜の言葉に、男は軽く肩をすくめた

「笑わすのが目的じゃないからね」

「それは冗談とは言わない」

「じゃあ、本気だ。本気の冗談。あるいは冗談のような本気」

「言葉遊びで煙に巻こうとしているのが、丸分かりなんだけど」

「分かるように話してるからね」

男はひらひらと手を振って、踵を返した。

数歩。

「ああ、そうだ」

立ち止まる。

「これから、君はある少女に出会う。もし彼女が危ない目に遭いそうになったら……いや、蛇足だな、こりゃ。忘れてくれ」

と、再び歩き出す。今度は立ち止まらずに、曲がり角を右へ消えた。

「……何だったんだ」

まさしく煙に巻かれた、といった態で、高浜はつぶやく。

まあ春だしな。

そう結論づけ、高浜は男とは逆の方向へ歩き出した。

左肩の一部が変色しているのに気付いたのは、その夜、風呂に入ろうと服を脱いだ時だった。少し大きいホクロぐらいだ。ちょうど男に叩かれた部分である。擦ってみても、落ちない。

まあ、いいか。

特に違和感があるわけでなし。風呂に入れば取れるだろう、と、高浜はそれきり、そのことを忘れてしまった。

高浜が八重畑ゆうと出会ったのは、春休み最後の日。

雨だった。

母親に買い物を頼まれ、不平たらたらに近所のスーパーへ。その帰り道である。

広場に立っていた。傘も差さずに、ずぶ濡れで。彼女の前には少し大きめの石が置いてある。それを見つめながら……笑っていた。よく見ると左手の甲をつねっている。どれだけ力を込めているのだろう。赤色を通り越して、青く変色している。

と、こちらに気付いたのか、視線を向けてきた。すっ、と笑顔が消え、能面のような無表情に。そして、こちらに背を向けると、駆け足で広場を出て行った。

次の日、新クラスでの最初のHRで、彼女のことが紹介された。

泣けない病気。

そんな病気を患っている生徒がいる、という話だけは、高浜も知っていた。噂では、一時期、いじめの対象になったこともあるという。彼女を泣かせることができたら勝ち。そんなルールのもと、複数人がかなりエグいことをしたらしい。結局、泣くどころか笑いもせず、ただ無表情でいる彼女の様子に飽きて、なあなあのままいじめも立ち消えになったらしいが。

彼女――八重畑ゆうは、担任からの紹介が終わると、誰とも視線を合わさず、自分の席に座った。高浜の隣。

「なあ」

あの時、なぜ声をかけたのか、高浜自身にも分からない。彼女の手の甲が、今度はどす黒く変色していたからだろうか。

高浜の声に、彼女は視線だけをこちらに向ける。

「昨日、広場で何やってたんだ」

わずかに、視線が揺れる。

「あなたに関係ない」

「まあ、そうだけど」

ファーストコンタクトはこんな感じ。

後に、死んだ飼い猫を埋めていたと教えてくれた。だいぶ後のことだけだ。

「動物には、表情を気にしないでいいから」

そんな風に言って。笑った。どちらの笑顔かは、高浜にも分からなかった。

半年。高浜とゆうが知り合ってから。

「そしたらすげえんだよ。そのじっちゃんが実は未来から来たサイボーグでさ、烈火の料理人見習いと呼ばれる凄腕のパンツ職人とウェイトリフティングで勝負を」

「なにそれ」

以前に比べて、温度がぬるくなってきたゆうの言葉。

「その勝負で負けそうになったサイボーグが、にらめっこの要領で、相手を笑わそうとするんだ。こんな風に」

と、高浜は自分の両頬をこねるようにしてみせた。ゆうが吹き出す。

「お、笑った？ いま笑ったな？」

それだけのことが、こんなに嬉しい。小躍りしながら、道を渡る。「ねえ、高浜君」

呼ばれた声に振り返るか振り返らないか。突然、けたたましいクラクションの音が響き渡った。

ものすごいスピードで、トラックが突っ込んでくる。道を渡りかけていた、ゆうに向かって。彼女は、驚愕と恐怖で動けずにいる。考える前に身体が動いた。

鞆を投げ捨て、跳躍するように走り出し、ゆうに肩からぶつかる。次の瞬間、衝撃とともに弾き飛ばされた。ガードレールに叩きつけられる。

そこまでだった。

意識が落ちる。

妙に左肩が熱い。その感覚も、また遠のき――。

Cパート ???

「要は紙芝居みたいなものなんだよ」

ソファに腰掛け、だらしなく足を投げ出したまま、男は言った。
隣に座った女性が首を傾げ、

「紙芝居？」

そう、と男はうなずき、

「紙芝居は一見、一続きのストーリーに見えるけど、実際には一枚の絵が独立している。俺達の脳が独立した複数の絵をストーリーとして補完して見せているんだ」

「つまり、時間も紙芝居のように、独立したものの集合だと言いたいよね」

「紙芝居みたいに少ない数じゃないけどね。1秒、0.1秒、0.01秒。そうやって区切っていけば、理論上は無限に存在することになる」

男はサイドテーブルの上に、さっと手をかざした。どこからともなく、皿に乗ったカステラが現れる。一緒に出てきたフォークで、男はカステラをつつきながら、

「もちろん、有限であると思うけど」

「でも、時間は過去と現在が連動してるじゃない。過去を変えれば、現在にも変化が表れる。だからこそ、あなたは今ここにいられるんじゃないの？」

「たしかに。俺が過去の俺を助けたからこそ、今の俺がある……という風に見える」

「違うの？」

「ああ。実際には、過去に干渉しなくても、俺が消えることはなかっただろうね」

再び、男はサイドテーブルに手をかざす。今度は、コーヒーが満たされたマグカップが二つ、現れた。そのうちの一つを男は女性に

渡した。女性のカップを受け取り、口をつける。

「それは、いわゆるパラレルワールド、ということ？　あなたが死んだ世界と死なない世界が平行して存在している、という」

「ちょっと違うな」

男もカップに口をつけた。

「苦い」

顔をしかめる。女性が笑みをこぼし、

「かっこつけて、オートメーションをブラックなんかに設定しておくからよ」

「この苦さが好きなんだよ」

と、男は、誰がどう聞いても強がりと思えない言葉を返した。一息ついて、

「俺の考えでは、世界、というか時間軸は一つだ。正確には、俺達が時間軸と感じているもの、ということだが。そこにランダムで『紙』が配置されるのさ」

「うーん……ごめんなさい、ちょっと分からないわ」

「紙芝居の例で説明するなら、桃太郎の紙芝居の中に、何枚かシンデレラの紙芝居が混じっている、という感じかな」

「それじゃあ、話の筋がめちゃくちゃになっちゃうじゃない」

男は首肯し、

「この世界も全く同じなんだ。いろんな『紙』がランダムに配置される。今、こうして話している次の瞬間には、俺が死んでいる世界という『紙』が配置されるかもしれない。もっと言えば、いきなり恐竜の時代になっている可能性だってある」

「ちょっと待って。それじゃ、どうしたって不自然になるわ。とてもまともな生活が送れるわけない」

「簡単なことさ。シンデレラの紙芝居の紙を認識しなければいい」

「ちょっと得意げに男は言う。」

「辻褄が合わない『紙』に対する認識を放棄し、必要な『紙』だけ認識、および再配置すれば、かくて矛盾のない世界、時間の流れの

完成、というわけさ。ただ、これも完璧なわけじゃない。既視感^{デジャヴ}なんかはいい例だな。経験してないはずのことを、以前に経験したような気がする。あれは、ほとんどの場合、認識や再配置の齟齬^{そご}から生じるのさ」

「じゃあ、あなたが造ったタイムマシンというのは……」

「紙芝居の『紙』を選択して認識できる装置、コグニッションマシンとも名付けようかな。これでようやく」

男は残ったコーヒーを一気に飲み干し、

「ようやく、君の病気を治すことができる」

「え……」

虚を突かれたような、女性の声。

「だからさ」

男は照れたように、そっぽを向き、

「これで君の病気が治った時間に行けば、治療法が分かるだろう。そうすれば」

皆まで言わず、女性が男に抱きついた。そのまま唇を重ねる。

「ありがとう」

笑顔で。病のための笑顔ではなく。

「でも、私ね」

言う。

「今でも、充分に幸せよ」

目を開けて、初めに視界に入っただのは、ゆうの笑顔だった。

泣き笑い。いや、雨か。雨に濡れてそう見えるだけ。

「大丈夫だよ」

高浜は安心させるように言う。彼女に笑顔でいてほしくない。

徐々に記憶が戻ってくる。トラック、撥ね^はられそうな彼女、弾き飛ばし、衝撃、落ちる意識、そして左肩の熱。その熱が、高浜を呼び戻した。徐々に熱が引いていく。役目は果たしたとばかりに。

「大丈夫、大丈夫だから」

先ほどよりも力を込めて、言葉を紡ぐ^{つむ}。実際、もうほとんど痛みはない。身体も普通に動く。手を伸ばすと、ゆうがその手をつかんだ。ぎゅ、っと、少し痛みを感じるくらい強く。

その手を握り返しながら、先ほどまで見ていた夢を思う。夢、だったのだろうか。会話の内容は、ほとんど理解できなかったが、一っだけ確かなことがある。俺も彼女を守り、救ってみせる。

雨音に混じって、救急車のサイレンの音が聞こえてきた。さて、目下の課題は、だ。救急隊員に、この状況をどう説明するかだな、と高浜は苦笑した。

Cパート ??? (後書き)

O r z

……あえて、何も言うまい。

お付き合いくださった方、ありがとうございます&ごめんなさい。
私には、ここいらが限界みたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5793g/>

紙芝居

2010年10月8日15時19分発行